表紙の人

キラキラ輝くキャンパスライフ 卒業後は憧れの『機中の人』に

学生記者が取材：Hakumon ちゅうおう Chuo

八木澤智恵さん
（総合政策学部４年）

「大学生活は本当にキラキラしていました。自分のやりたい事にいっぱい挑戦して、いっぱい笑って、素敵な人とたくさん出会って。とにかくい～っぱい笑いましたね」

大学４年間を振り返る短い会話のなかに、「いっぱい」という言葉が３回。挑戦、出会い、笑い…そして勉強と、キャンパスライフを目いっぱいエンジョイしたことが、言葉の端々からほとばしる。

「楽しかったなぁ」と明るく笑顔が耐えないのは、性分なのだろう。

話し好きで、デパ地下でバイト〝笑顔コミュニケーション〟を体現

振り返って、まずはアルバイト。「話すことが好き」で、いろいろなお客さんと出会うデパ地下の弁当・惣菜売り場でバイトをしていた。

「お昼を買いにきたＯＬさんに、『このお弁当を食べて午後もがんばってくださいね』というと、『お姉さんも！』と言われ、逆に励まされたりしました。そんな一言二言のやりとりがすごく楽しかったですね。笑顔で接客しているだけで、気持ちが良くて…」

笑顔は、〝元気印〟の源泉である。笑顔で楽しい気分を振り撒き、触れ合った人からは逆に励ましをもらう。こんな〝笑顔コミュニケーション〟の効用をアルバイトで体現してきた。

次は勉強。環境問題に高校生のころから関心をもっていたこともあり、大学１年次に、「sustainable living（持続可能な生活）」というテーマで環境について勉強。その授業の一環として夏休みにオーストラリアへ行き２週間のフィールドワークもおこなった。

「sustainable living」というテーマのもと、「持続可能な食生活」とか「持続可能な消費行動」などといった身近な生活の側面から環境について考え、学んだ。オーストラリアへ行くまでの前期授業では、テーマに沿った英語の文献を毎週読み、２週間に一回それを英語で要約し、みんなでディスカッションした。

「オーストラリアでは、エコビレッジ（持続可能な生活を実践している村）に行きました。クリスタル・ウォーターズという名前の村で、農作業をしたり、オーガニック野菜でつくられた料理を食べたり、病気の羊に注射をしたり、ナイト・ウオーキングもしました。自然と共存している村で、ゆっくり時間が流れていましたね」

八王子市のゴミ問題を調査ゼミで「地球規模とＮＧＯ」研究

夏休み後の授業では、それまでの理論とフィールドワークをもとに「さらなるアクション」をおこした。「知ることの大切さを学び、現状を知らなければ何も改善できない」との考えから、身近なゴミの問題に着目し、八王子市のゴミ処理の現状、問題点について調査した。

ゴミの行方を追い、その量や処理のされかたを知ると同時に、「ゴミ処理に携わっている人の苦

労を知ることもできました」という。ゴミの分別をしている人が、「飲み終わったジュースの缶をちょっと洗ってくれたり、きちんと分別してくれたりしたら私たちは楽なのに」と言っているのを聞いて、「自分たちの行為が環境に及ぼす影響だけではなくて、人にも影響しているということを実感したんです」。自分のしたことが及ぼす影響を考える。自分がしたことに責任を持つ。社会に出れば当たり前のことを肌で学んだ。

3年次からは、目加田ゼミで「地球規模課題とNGO」というテーマについて勉強。ここでもグループワークで環境班の一人として「外来生物」について研究した。このほか「紛争」、「人道的介入」、「女性問題」などさまざまなテーマについて毎週文献を読んでディスカッションした。

「ゼミでは葛藤の連続で、遠い世界で起きていることを今ここで勉強したからって何になるのかって思ったりして。でも、現実に目を向けることの大切さ、怒りや問題意識をもつことが、何かの行動を起こすきっかけになると思うようになりました」

ミス・インターナショナルにも挑戦 キャビンアテンダントで夢実現

キャンパスライフとは別に、実はこんな活動もしていた。読者モデルをきっかけに、2年生から4年生の春までモデルの仕事をしていたのだ。「ウェディング冊子やウェディングショーのモデルをやったり、ヘアショーのモデルをしたり、時々テレビの仕事もしました」

さらに、ミス・インターナショナルにも挑戦したという。「モデルの仕事をしていたので、なにかステップになるんじゃないかと思ったのと、世界中の人と交流できたり、海外に飛び出せるかもって感じたので。チャリティーイベントなどを通して地球規模課題に対して何か出来るんじゃないかと感じたからです」。結果は、最後の35名のなかには選ばれ10月の本選まで進んだが、入賞することはできずそこで終わってしまった。

しかし「美の親善大使」という任命を受け、ハワイへPR活動に行ったり、インターナショナルパーティーに参加したりして一年間活動した。

卒業後は、小学生のときからの夢だったJALのキャビンアテンダントになる。「飛行機のなかの独特な雰囲気が好きなんですよ。世界中、いろんなところに行きたい。それと、人にサービスするのって楽しいなぁって思って」と目を輝かせる。

憧れを現実にするため、「中学ではすごく英語を勉強」して、国際系に強い高校に進学した。高3の夏からは、一年間留学。「大学も国際系に力をいれている中央大学の総合政策学部にした」という。「キャビンアテンダントになるための変な努力は別にしてないですね」というが、六本木にあるキャビンアテンダントになるための学校に大学2年の夏から2年間通った。「情報収集ができたり、みんなそれを目指している人が集まるのでモチベーションが高まったりっていうのはありました」

輝き、華やいだキャンパスライフだ。話を聞いているうち、こちらもなんだか明るくなり、上昇気流に乗っていく気分になった。

（学生記者　武田朋実＝法学部2年）